
夜のシラベ

羽茂哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜のシラベ

【Nコード】

N7879X

【作者名】

羽茂哉

【あらすじ】

ヨルは夢を見る

大切な記憶を紡いだ夢を

傳きシラベ（前書き）

全6話の話になります。気長にお待ちください
（リメイク作品です）

傳きシラベ

淡い色のカーテンからは朝の日差しが遠慮なく射し込んでいます。それを見るたびにまた今日が始まったと否応なく実感させられ憂鬱な気分になる。

無論、憂鬱になるのはそれだけが原因ではない。

夢だ。

私は決まって同じ夢を見る。

いや、夢というより過去の記憶と言うべきか。

あれから、もうかなりの年月が過ぎたにも関わらず私を捉えて離そうとしない忌まわしい過去、それと同時に忘れてはいけなない大切な記憶。

私はため息をつきながら、寝汗で濡れている髪をぐしゃぐしゃと掻きむしりベットから起き上がった。

汗で服がまとわりつき、何とも不快な気分だ。

私は服をその場で脱ぎ捨てシャワーを浴びようと浴室に入る。

浴槽には大きな姿鏡があり、私の全身が映し出されていた。

手入れをろくにしていない長い黒髪がやる気のなさそうな漆黒の瞳にかかり鬱陶しそう。

せつかくの筆ではらったような切れ長な眉も、半開きに口を開けた阿呆顔のおかげで台無しになってしまっている。

シャワーから温かい水が滝のように溢れ出し湯気が立ち込め、鏡が曇り始める。

こんな場所にいつまでいなければならないのだろうか。

どうせなら今すぐこのまま消えてしまいたい。

そんなめんどくさい事を思いながら、私は頭からお湯をかぶった。すぐに熱が全身に伝わり、段々と眠気が引いていく。

意識がはつきりし始めると今度は空腹が私に襲いかかってくる。

「面倒くさいな……朝飯」

自身の腹部を撫でながら呟き、シャワーを止めて浴室の扉を開ける。

溜まっていた湯気が外に飛び出し、消えていく。

タオルで体と髪を拭き、ドライヤーなど素通りで私は服に着替える。

少し湿った髪が顔や服にへばりついて気持ち悪い。

だが、それ以上に髪を乾かすのがめんどくさい。

結局、私の中で怠惰が打ち勝ち、そのまま部屋を出る。

外は朱い絨毯が敷き詰められた廊下が一本の糸のように続いている。

その果ては見えない。

いつもながら嫌気がさす。

ため息をつきながら果ての見えない廊下を歩き出した。

食堂に到着したのはそれから三十分ほど経過してからだった。

私は食券を買いに数人の列に並ぶ。

パサパサの髪を撫でながら私は自分の番を待った。

幸いなことに数分もしないうちに私の番となり、すぐに食券を購入し終えて料理と交換する。

私は基本的に和食派だ。

トレイに乗っている味噌汁と白米が湯気を立て鼻を刺激し食欲をそそる。

私は近くの席に腰を下ろし、箸を手取る。

おかずは玉子焼きとあじの開き、そして胡瓜の塩漬け。

早速、胡瓜の塩漬けに手を伸ばす。

だが、横から白い小さな手が先に伸びていた。

小さな手は胡瓜を手掴みで持っていき、薔薇色のおちょぼ口に一瞬にして吸い込まれ消えていった。

「うん、美味しい」

肩まで伸ばしてあるブロンドの髪は一本一本が艶やかで根元から毛先までおさまるまつまり感を持っている。

そして傍から見て、分かるほど髪の内側からはつるおいを感じる。私のパサパサの髪とは大違いだ。

「……どういづつもりよ。ユピテル？」

私は殺意をユピテルに向ける。

食事を邪魔されるのが、一番腹立たしい。

「良いじゃない。ヨルには過ぎたものを私が食べてあげたんだから」

ユピテルは反省の色が全く見られず、無駄に可愛らしい顔をこちらに見せつける。

私は無言で右拳をユピテルに目がけて放つ。

ユピテルは素早くそれを避け、腹立たしい笑みを向けてくる。

「怖いなあー、すぐに手を出すのは良くないよ」

「うるさい！大人しく死ね」

私は乱暴に立ち上がり全力で襲いかかった。

だが、ユピテルはまるで空中に浮く紙のようにフワリと流れる。何度、拳を放ってもユピテルの白い肌にはかすりもしない。

「危ないなー」

口ではそう言うがユピテルは自身の猫目を線にして嬌笑を浮かべ

ている。

私は舌打ちをしながら逃げるユピテルを追いかけた。

ようやくユピテルを捕まえた時にはすでに食堂は閑散としていた。私はユピテルの頭を鷲掴みにしている。

ユピテルは本当に素早く、まるでサバンナに生息する草食動物のようだった。

まあ、私にかかれれば大した事はない。

と、心の内では強がってみたが流石に疲労が体に蓄積されているのは誤魔化せなかった。

肩で息をしながらユピテルに微笑む。

「泣かせてやるから覚悟しなさい」

私がそう言い終わると同時にユピテルは唾を私に吹きかけてきた。

顔にねっとりとした唾液が滴る。

気がついたら私は拳を振り上げていた。

「……」

「良いじゃない！別に胡瓜の一つや二つ」

食事をとっている私の隣でユピテルは頭を痛そうにさすりながら愚痴をこぼしてくる。

結局、私は拳骨一発で許してやった。
自分でも寛大な処置だと自負している。
だというのに、ユピテルには反省の色が一ミリ程も見られない。

「うるさい。少しは反省しなさいよ」素っ気なく返答する。

ユピテルは頬を膨らませふてくされている。
そんな時だった。

スピーカーのから地鳴りのような音が流れ出す。
その瞬間、私たちは凍りついたように沈黙しだす。

『今日の試合内容を発表致します』

気まずい空気が螺旋を描くように辺りを覆っていく。

心音の高鳴りと焦り、不安が混じり合い不快な音楽を奏で始める。

『第一試合……』

私は一言全てを聞き漏らさぬように耳を鋭くたてる。

次々と呼ばれていく名前。

どれもこれも知らない名前ばかりだ。

『第五試合 ユピテル、ヨル』

目の前にいる少女と私の名が放送から流れる。

私は隣のユピテルを見つめる。

ユピテルも私を見つめていた。

めんどくさい。

私は心底、そう思うのだった。

私たちは長い廊下をひたすら無言で歩いていた。

歩調を全く変えず、ユピテルは私の前を進んでいる。

呼吸するのも嫌になる気まずい空気が私たちをしつこく取り巻いていた。

何か話でも振ろうかと何度も考えたが、言葉は寸前のところで私の中に戻ってしまふ。

「ねえ……」

そんな時、ユピテルの小さな声が私の変わりに沈黙を破った。

「なに？」

「ヨルって戦績どうだったけ？」ユピテルは抑揚のない声で私に問いかける。

「四勝二敗」

「ふーん。私は五勝一敗」

「なら、今日で二敗ね」

「三敗の間違いじゃないの？足し算もろくに出来ないんだ」

小生意気な返事をしながらユピテルは振り返り、後ろ向きに歩き始める。

その顔は少し悲しげな表情を見せていた。

本当にめんどくさい奴だ。

円形のドームのような施設。

所謂、コロシウムというやつだ。

私たちがそこにたどり着いた頃には四戦目が終わりを迎えていた。すぐに二人でコロシウムに上がる。

そして所定の位置につき、試合開始の合図を待った。

観客席には同じ仮面を付けた者達が寿司詰めのように敷き詰められている。

飛び交う歓声がどうにも耳障りで不快だった。

「本当、不愉快よねー」

私の対角線上にいるユピテルは私に話しかけてくる。

思っていることはどうやら同じようだ。

「さっさと終わらせればいい話よ」

私の眼光がユピテルを捉える。

それと同時に試合開始の合図が鳴り響く。

歓声はそれに呼応するかのように激しさを増していく。

ユピテルは目を線にして笑う。

「その通りよね。……ならー！」

そう言って息を吸い込み、そして吹き出す。

すると直接、目で確認出来るほどの空気の衝撃波が飛んでくる。

衝撃波の範囲は私に近づいてくるに連れて広がっていく。

この範囲では避ける方が難しい。

私は防御体勢をとった。

その刹那、風の刃が私に襲い来る。

体のあちこつちに切り傷が生まれていき、血が滴り落ちていく。

「……やっぱり、避ければ良かった」

小声でそうもらした。

結構、痛かった。

その後の戦局は防戦一方。

ユピテルの口から放たれる衝撃波が波紋のように広がりていき、私は近づく事すら出来ないでいた。

私の能力は相手に触れないと効果がない。

逆に、相手に少しでも触れてしまえば私の勝ちは決まりなのだが、遠距離戦を得意とするユピテルは私にとって最悪の天敵だった。

私は試合場をグルグルと脱兎の如く逃げ廻りながら近づく隙を窺う。

だが、その間も風の刃は確実に私の肌を切りつけていく。傷口からは熱を発している。

「あー、めんどくさい！」

「なら、さっさとやられちゃいなさいよ」

ニタニタとユピテルは笑みを浮かべる。

調子づいたユピテルを見ていると無性に腹が立った。

何よりこれ以上、負け星をつけたくない。

そう思っている矢継ぎに襲いかかってきていた疾風の刃が突如として動きを止めた。

私は好機と思い、ユピテルに右腕を伸ばしながら突っ込んでいく。

「バーカ」

腹立たしい、その一言と同時にユピテルは口の中にパチンコ玉のようなものを放り込む。

明確な死のイメージが私のなかで浮かび上がってくる。

私はすぐさま斜線上から退避し、右側に転がる。

その時には既に音速のスピードで玉がユピテルの口から射出されていた。

射出された玉は美しい銀色から紅色に変化する。

そのまま一直線上の地面を見事に砕いていき、端っこの壁まで粉砕していった。

あまりの破壊力に歓声は歓喜に沸き上がる。

微かにだが、耳なりがしてくる。

「あと、ちょっとだったのに」

いかにも、残念そうな表情を浮かべるユピテル。

今のをまともを受ければ間違いなく上半身が消し飛んでいただろう。

私はすぐに大勢を立て直し、次の攻撃に備えた。

「もういいわ。コレで、終わりにしてあげる」

コピテルため息混じりに肩をならし、先の比にならないほど空気の弾丸を打ち出してくる。

さながら、マシンガンと言ってもいいだろう。

とても避けきれるものではなく、弾丸は私の体を何発も貫いていく。

体が熱を発し、激痛が全身を駆け巡る。

弾丸の嵐が収まった時、私の体はそれこそ蜂の巣状態だった。

風穴だらけの私の体からはまるで滝のように鮮血が飛び出している。

腹部からは出た血はこれでもかと言うほど服に染み着いていた。

立っていられず、膝が地面につき悶絶してしまう。

口から飛び出す赤は水たまりを作り出し、そこには私の傷だらけの顔が浮かび上がる。

見るからに死にそうな顔をしている。

私達の体は普通ではないくせに人並みに痛みを感じる。

あいつらもいい趣味してる。

私は横目に観客席を睨みつける。

先から、聞くに耐えない腐りきった声が私の鼓膜を揺らしている。

どいつもこいつも、私のこの姿を観て楽しんでる。

痛みを感じないんじや淡泊な味気ない試合が続くだけ。

観客が観たいのは最高にイカれた舞台。

今の私のような哀れにも激痛で悶え苦しむ姿はさぞお望みの光景に違いない。

憤怒の焰が私の腹の中で熱く燃え上がっていく。

それと同時に襲いかかる死への続く眠気。

それでも否応なく再生していく体。

息は楽になってきたが、まだ私の体はくたばり損ない同然だった。

「まあ、ヨルにしては頑張ったんじゃない」

すっかり、自分の勝利を確信しているユピテル。

私の体は肘と膝で支えられている状態だ。

先の攻撃で右手の指は三本に減っていた。

コレでは猫の手と何ら変わらない。

もう使い物にはならないだろう。

私は左手を僅かに動かし確認してみた。

少々の痛みはあつてが左は問題なく動いた。

まだ勝ち目はある。

ユピテルは今、物凄く慢心している。

反撃なんて予想もしていないはず。

後は、私が根性を見せるだけだ。

歯を食いしばり、ユピテルを睨みつけ必死に立ち上がる。

それにより骨が軋み、血を吐き出す。

微かに笑みを浮かべながら、私は小さく咳く

「絶……対、泣かしてやるから」

私は地面を蹴るように走り出した。

一歩、足を踏み出すたびに吹き出る血と激痛。

それでも私は止まらなかった。

「どっせ、直進しか出来ないでしょー!」

ユピテルは思いつ切り空気を吐き出す。
空気の刃は素早く私を捉えに来る。

確かに、回り道するほど私には余裕も気力もない。
どんな馬鹿にだって、それくらい分かる。

空気の刃はもう私の目と鼻の先にまで迫っている。

だが、ここで止まれば私の負けは確実。

だから、私は右腕を捨てる事にした。

無傷の腕を守るように三本しか指がないもう片方の腕を盾にする。

案の定、指は全て吹き飛び、皮がえぐれ、白い骨が姿を現す。

それでも、私は止まらなかった。

完全に片腕が吹き飛ぶ。

だが、十分だった。

既に、ユピテルとの距離は腕一本分にまで迫っていた。

私はユピテルの頭を念願の鷲掴みにする。

「泣かして……あげる」

かすれた声で囁く。

恐らく、聞こえてないだろう。

だが、これで私の勝ちだ。

次の瞬間、ユピテルの絶叫がコロシウム全体に響き渡る。

先までの歓声が嘘みたいに静まり返えり、まるで誰もいないかのようだ。

ユピテルの耳からは血が流れ出し、地面に滴り落ちていく。

私の能力は至ってシンプル。

触れた対象の感覚器官を操る。

私がユピテルにしたのは痛覚を数倍に跳ね上げるといふものだ。

皮膚に少しでも触れればあまりの激痛に気絶する。

つまり、鷲掴みにされてる時点でその痛みは計り知れない。

ユピテルの目には血涙が溢れている。

その姿は同情さえ芽生えてきてしまう程だった。

私の鼓膜にまで穴が空きそうなその悲鳴は耳を塞ぎたくなる。

だが、ここで止める訳にはいかない。

私は弱り切った体に鞭を打ち全力でユピテルを掴んだ。

ユピテルは痙攣し始め、絶叫はピタリと止む。

私が手を離すとユピテルは糸の切れた操り人形のようにぐったりと力なく地面に崩れた。

それは正に死体だった。

たった、一分程でユピテルは死んだ。

それはとても短く、そしてあっという間であった。

虚無感が私の矮小な心を満たしていく。

何度やってもこれだけは慣れない。

否、慣れたくなどない。

私は激痛と眠気に身を任せ仰向けに倒れ込んだ。

上はドームの屋根が見えるだけ。

空さえ見えればまだ、ましだったかもしれない。

静まり返っていた観客席が騒ぎ出す。

本当に不愉快だ。

だが、文句一つ言う事が出来ない。

今更ながら、有り得ない程の激痛が襲ってくる。

私の意識は沢山の歓声の中に消えていくのだった。

出合いはとあるスラム街だった。

その時の彼女はただの弱い子供だった。

だが、私はその子になけなしの愛情を差し出していた。

誰でもよかつたんだ。

私は愛情が欲しかった。

たった、一人でもいい。私を必要としてくれる人が欲しかった。

だから、私は自分より弱い者に助けを差し伸べた。

彼女はそんな私の卑しい心うちを知っていたのか、それとも知らないのかそれは分からない。

どちらにしても、彼女は私の期待に答えてくれた。

それからあの日、私が死ぬまで私達はずっと一緒にいた。

天井だ。

真っ白な清潔感溢れる天井。

何度も見たことのある天井。

私は部屋中が白で統一された医務室のベッドで横になっていた。どうやらあの後、私は気を失ったようだ。

随分と疲労が溜まっているのか、まだ体が悲鳴を上げていた。

「気がついたか」

聞き慣れた、男の声が私の耳に届いてくる。

まだ、意識が混濁してはいるが、私はベッドから起き上がる。

薬品の臭いが私の鼻腔を刺激する。

少し先にデスクがあり、そこにはシエルが座っていた。

「……試合は？あと、どうでもいいけどユピテルは？」

私の問いにシエルは肩をすかしながらゆっくりと答える。

「起きて早々にそれか、試合はお前の勝ちだ。それと、ユピテルならふくれっ面でお前の事を待っているぞ」

「そう」 思わず、ユピテルの顔を想像してしまい笑みがこぼれ出す。

「腕も修復されたし、もう大丈夫だろう。もう少し、休んでいくといい」

シエルはそう言うと、椅子から立ち上がり医務室から出ていった。言われなくとも休んでいく。

というより動けないの方が正しい。

私はまたベットに横たわる。

だが眠くはなかった。

それでも私は瞳を閉じ、疲れと痛みが消えるのを待つことにした。視界が漆黒の闇に覆われ始める。

自然と遮られた視界に変わり聴覚が目の代わりとなり敏感となる。すると段々と足音が此方に近づいてきているのが分かった。

「ヨルー」

ドアを開ける音と共に小うるさいユピテルの声が聞こえてきた。私はあえてそれに反応しなかった。

すると、ユピテルの足音はどんどん私の元に近づいてくる。

「まったく、私がわざわざ来てあげたんだから起きなさいよ」

生意気な発言をしながら、ベットに近づき私の肩を揺らす。めんどくさい奴。

先まで、死人だったとは思えない元気っぷりだ。

何だか、生きていた私より死んだユピテルの方が元気であることに不満がでてくる。

「うるさい」

私は一瞬だけ目蓋を開き、一言だけ伝えるところに目蓋を閉じた。ユピテルの事を少しでも心配した私が憎らしい。

無論、この程度でユピテルの口が止まるはずがなくこの後、試合での負け惜しみが始まった。

「だいたいね。私が最初から本気を出してればあんななんて楽勝だったんだから」

「あんだだけ泣き叫んでよくそんな言葉が吐けるわね」

「ヨルだって、片腕吹き飛んで死にそうだったくせに」

しばらくの間、私達はお互いに弄りあう。

だがそのくだらない会話は私の気分を楽にさせてくれた。

心の中でほんの少し、本当に少しだけ私はユピテルに感謝した。

あれから適当にユピテルの相手をしてやり、しばらくして私は自室に戻ってきた。

暗がりの部屋の中、私はすぐさまベットに飛び込む。

マットレスは優しく私を受け入れてくれた。

今日は疲れた。

めんどくさい事ばかりだった。

胡瓜は食われるし、体は穴だらけにされるし、仕舞いには腕を吹き飛ばされた。

けれど、これで私の勝ち星は五になった。

「あと……五勝」

私はうつ伏せの状態で拳を強く握りしめ、眠りにつく。
そして、またあの夢が始まるのだった。

無への足音

「これで……九敗か」

医務室の中、シエルは椅子に座りながら吐息のような小さな声で
呟く。

ベットには男が横たわっていた。

茶色短い髪の毛は逆立ち、瞳はすっかり色あせている。

男はひたすら沈黙を続けていた。

すると、シエルは横たわる男の元にゆっくりと近づいていく。

「テオドール……分かっていると思うが、もうあとがないぞ」

テオドールと呼ばれる男はそれを聞くと唇を噛み締める。

恐怖が心だけでなく体をも支配していた。

「……分かっている」数分の間で出てきたのはその一言だけであっ
た。

「そうか……なら、しばらく休んだら自室に戻れ」

シエルはそれだけを伝えたと静か医務室から出ていった。

彼が退出した瞬間、テオドールはシーツを強く握りしめ、歯を食
いしばる。

どこにも彼の味方はいなかった。

ただただ、迫り来る無への足音に震える。

「……分かってるさ」

静かに恐怖と戦う彼の声が波紋のように部屋に広がっていく。
そして儚く散るのだった。

空からは白銀の粒が降り注いでいる。

それは、触れると冷たくそして、すぐに消えてしまう。

その粒達が地面に落ち、一面の銀世界を創っている。

私達はそんな世界を歩き続けていた。

新しく足跡がつくられるたびに古い足跡は消えていく。

私は立ち止まり、後ろを振り返る。

すでに、足跡は消え失せ、もはやどこから来たのかすら分からなくなっていた。

私はその光景に不安を覚える。

一方、彼女は私が立ち止まっている事に気づいていなかった。

私は焦って彼女に呼びかけようとする。

だが、私の声は銀世界に吸い込まれ彼女には届かない。

どんどん、彼女の背中は小さくなっていく。

私は彼女を急いで追いかけた。

だが、私と彼女の距離は一向には縮まず、むしろ遠ざかっている。そして、彼女の姿は銀世界に消えていくのだった。

夢から覚めると朝だった。

それは一日の始まり。

そう、めんどくさい一日の始まりだ。

体が重く感じ。ベッドから起き上がる気力がわかない。

けれど、私の胃袋はそんな事は関係ないと言わんばかりに朝食を欲していた。

「おなかすいた……」

私の呟きが静かに部屋の空気を揺らす。

誰か食事を私の部屋まで持ってきてくれないだろうかと願ってやまない。

むしろこの際、身の回りの世話をすべてこなし、私の言うとおりに働く従順な奴隷が欲しいと思えてくる。

そうすれば、私は何もせず一日中寝て過ごす事だって出来る。

そうなる候補は一人しか浮かんでこなかった。

私は従順な奴隷となったユピテルを想像してみる。

妄想の中のユピテルは甲斐甲斐しく私のために笑顔で尽くしてくる。

「……気持ち悪い」

何とも表現しがたい気持ち悪さだった。

我ながら選択ミスと言わざるを得ない。

そもそも、ユピテルはどうせ何やらしても駄目であろうし、実際にやらせたらわざと失敗ばかりして私を困らせるに違いない。

ふと冷静に考えてみると馬鹿みたいだ。

私は何をわけの分からない妄想をしているのだろうか。

妄想の霧を振り払い、ベッドから頭を起こす。

目眩と喉の乾きが酷い。

やはり、朝はまともに思考が働かない。

かすかに私の腹が朝食の催促を叫んでいる。

品性の欠片もないその叫び声が私の耳に伝わってくる。

憂鬱な心持ちのまま服を着替え、重い枷をつけたような足取りで部屋を出た。

さながら、その姿は墓場から這い出てきたゾンビのように見える事だろう。

世界が気持ち悪いくらい回っていた。

私の頭はすっかりピンク色の花畑にトリップして足が覚束ない。

私の頭は相当、狂ってしまったようだ。

流石に昨日からずっと寝ていてはどんな人間でもこうなってしまうだろう。

と言っても、体調が悪かったから一日中、寝ていたのではなく単に億劫で起き上がる気にならなかったというのだから我ながら救いようがない。

最近の私は本当に無気力すぎた。

忘れもしないあの穴だらけスポンジ状態にされたユピテルとの試合から半年。

それ以来、一度としてあのコロシウムに降り立っていない。

毎日五回行われているあの試合。

対戦がランダムで決定とはいえ、インターバルが長すぎた。

お陰で私はすっかりこの様である。

本当に自分でもそろそろ不味い気がしてならないが、こればかりはどうしようもなかった。

ようやくたどり着いた食堂は相変わらず寂しい光景だった。

皆、特に談笑することなく静かに食事をし、食器を叩く音だけが響いている。

食堂を取り囲む辛気臭い雰囲気には私は嫌悪感を持ちながら食券機の前に向かう。

次の瞬間、私は絶望した。

「……何で和食が一品もないのよ」

項目には洋食ばかりが並び和食項目は何一つ見当たらないよりによって私の嫌いなオムライスの項目など二つもある。

これは新手の嫌がれせなのだろうか。

私は機械を両手で鷲掴みうめき声をあげながら揺らした。

無論、こんな行為に意味などない。

だが、やらずにはいられなかった。

気がつけば、腹立たしさのあまり私は機械に向かって渾身の右ストレートを放っていた。

私の右は空を切り、鉄の体に直撃する。

拳が機械にふれた瞬間、激痛が全身を駆け巡っていく。

そして、機械からは大量のオムライス券が吐き出されていく。

その瞬間、先とは比べ物にならないほどの絶望感が私の心を満たしていく。

私は右手をさすりながら悪役顔負けの高笑いをする。

もう、笑うしかなかった。

これほどの奇禍はきつと一生訪れることはないだろう。

私は涙を堪えてそれを噛み締めた。

そして、机には大量のトレイとオムライスの山が連なる事となった。

ケチャップで味つけされたチキンライス、その上には黄色に輝く卵が被さり、デミグラスソースが木の葉型に成型された皿にまんべんなくかけられている。

見ているだけで、嫌気がさしてくる。

だが、ソースの匂いが鼻孔を刺激し、私を現実に戻して現実逃避させてくれない。

そして、私の隣には憎たらしい笑みを浮かべているユピテルがいた。

先から、ユピテルは何も話しかけてはこず、ただ嗤笑するだけだ。本当、めんどくさい奴だ。

「大変そうねー」ようやく話しかけてきた言葉は心にも思っていないであろう同情の言葉だった。

「……うるさい」

「あれー、何か言った？小さすぎて聞こえなかったんだけど」

何かが弾け飛ぶ音が脳裏に響きわたる。

それでも、私は唇を噛み締めてオムライスと睨み合いを続けた。

「全く、体ばつか大きくなって脳みそが子供の頃から成長してないんじゃないの？ あ、別に食って寝るしかする事ないんだしいらないか」

矢継ぎに跳んでくる挑発の言葉を私は無視し続けた。

私はオムライスが美味しいものだと言いに聞かせる。

無論、嘘である。

「そう思ったら、ヨルって豚と何ら変わらないわね」

豚という単語で豚カツを最近食べてない事を思い出した。

ああ、久しぶりに食べたい。

「どうせ、最近豚カツ食べてないとか考えてるんでしょー」

何故、分かったのだろうか。

「止めときなさい。共食いは醜いわよ。あー、でも元々醜いから関係ないか」

仏の顔も何とやらだ。

私は笑みを浮かべながら、ユピテルを見つめる。

「私があまりに綺麗だからって僻むなよ……どブス」

「誰がブスですって？」

「あんた以外に誰がいんのよ」

ガンをどばしながら、言い切る。

私に比べたらユピテルなんてただ、背が小さくて目が大きく、肌が人形みたいに白くて、声が鈴みたいに澄んでいるだけでたいした事はない。

「よく自分の顔を鏡で見てきたら？自分の発言が恥ずかしくて死に

たくなるわよ」「何とも失礼な発言をするユピテル。

殺意が腹の中を暴れまわっているが私はあえてすました顔をした。

「なら、あんたの場合あまりにブサイク過ぎて鏡が割れちゃうんじゃないの?」

私がそう言うとユピテルは勢いよく椅子から立ち上がる。

その振動で椅子が倒れ、周囲の目が私たちに向く。

「調子のんなよこの糞女!」澄み切ったその声とは裏腹に暴言を放つユピテル。

「それはコツチの台詞だ糞チビ!」私もまた、椅子から立ち上がり、ユピテルを見下ろした。

「黙れ!でかいだけしか能がない癖に」

あまりに馬鹿馬鹿しい反論だったので軽く一蹴してやる。

「あらあら、どチビもといどブスのユピテルちゃんが僻んでる」

「……でかいだけで胸ないくせに」

小声で言い返すユピテル

だが私の耳はその発言を聞き逃さなかった。

『胸がない』この言葉が脳内を駆け巡り私の理性を吹き飛ばしていく。

反射的に私はショートアッパーをユピテルに仕掛けていた。

だが、ユピテルは咄嗟に前足を後ろに蹴り回避する。

私の拳はユピテルの鼻をかすめる程度で空を切った。

「なにすんのよ！」 鼻を押さえながら、ユピテルは怒声を上げる。

「自分の胸に聞いてみる！」

私は大きく右足から踏み込みボディーを狙う。

ユピテルは私がボディーを狙ってくる事を察知し、あえて詰め寄ってくる。

そのまま、肘で私の拳を弾き軌道をそらす。

そしてもう片方の手で私の服の襟を掴み机に押し倒してきた。

「甘いのよ」

ユピテルは私を見下ろしながら微笑んでくる。

これは所謂、マウントポジションというやつだ。

「これからヨルの大好きなモノをあげる」

そう言っただけユピテルはポジションは崩さず器用に机に散乱しているオムライスを一皿手にとる。

すぐにその後されるであろう行為が脳裏に浮かび上がり、私は焦った。

「ちょっと待った！ソレはシャレにならない！」

黄色の悪魔が私のすぐそばまで迫り、自分でも信じられないくらいに動揺が表に現れ出していた。

ユピテルの顔は段々と恍惚とした表情に変わっていく。

「私、ヨルのそういう表情は好きよ」

脳から足の先まで危険信号が発信される。
人工物臭い卵の匂いが私の鼻腔を支配する。
途端に瞳から一粒の涙がこぼれ落ちる。

「……お願いだからそれだけは」

がらにもなく命乞いをする。

私にとってオムライスはそれほどまでに恐ろしいものだ。
この際、プライドなどゴミ箱に捨ててしまっただけ構わない。
私の願いを考慮しているのかユピテルが暫し考え込む仕草をし、
わずか十秒ほどで結論をだす。

「……ダーメ」

この時のユピテルの冷笑を私は一生忘れないだろう。
次の瞬間には私の顔面はオムライスが直撃していた。
今日は本当についていない。

トイレの洗面台で髪を洗い終わると、早々に蛇口をひねり水をだす。

銀の口から吐き出される水を私は両手ですくい顔にぶつけた。
痛みに近い感覚が顔面を通して全身に伝わっていく。
しっかり洗ったつもりだったが、まだオムライスの匂いがしみついている。

「……ユピテルめ」

私は鏡に映る自分を見つめながら悪態をつく。いつもなら、ユピテルなんかにしてやられる私ではないのに今日に限ってこんな無様な醜態を晒してしまった。全くもって、今日についてない。私はため息をこぼし、トイレから出ようとした。だか、タイミング良くあの地鳴りのような音が流れだし、私の歩みを止めた。嫌な予感が私の脳裏によぎる。

『第一試合 ヨル テオドール……』

案の定だった。

やはり、今日とはことんついていない。

私は心底、めんどくさいと感じるのだった。

トイレを出るとユピテルが腕を組みながら神妙な顔つきで壁にもたれかかっていた。

その姿に先までの馬鹿らしい雰囲気など微塵も感じない。

「ヨル……今日はついてないわね」 ゆっくりと口を開くユピテル。

お前がそれを言うのかと思ったが、あえて口にしなかった。

不安を誤魔化すように軽い口調で私は返す。

「まったくよ。ま、最近なかったしそろそろとは思ってたけど」
私がそう言うと、ユピテルは肩をすぼめながら首を横に振る。

「そつちじゃなくて、どちらかと言えば対戦相手の方よ」 私はユピテルのその言葉を耳にすると、同時に何か嫌な予感が私の背中を過ぎるのを感じた。

「強いのか？」

私が今、最も恐れているのは戦いで負ける事だ。
故に、私は内心恐る恐る訊ねた。
しかし、ユピテルはそれにも首を横に振った。

「逆よ……多分、最弱」

「なら、勝ち星稼げて寧ろラッキーじゃない？」

「リーチついてんのよ……あんたの相手」

『リーチ』それは私達の間では最も聞きたくない言葉だ。

一瞬でも相手が最弱と聞いて安堵した自分を叱りつけない気分だ。
最弱だからこそ起こりうる可能性を私はすっかり忘れていた。

今日の私は史上最悪の運の悪さだ。
改めて、私はそれを噛みしめる事になった。

約半年ぶりのコロシラム。

相変わらず、観客席は同じ仮面を付けた者達が寿司詰めのように
敷き詰められている。

コイツらにとって私達の戦いは余興か賭事のどちらかではない。
本当に最低な連中だ。

実際には出ない腹立たしくて反吐が出る。

私の対角線状には茶髪の中肉中背の男が立っている。
端から見ても、明らかに虚ろな目をしているのがよく分かる。

今にも倒れそうなその姿は見ていただけで、いたたまれない。確か、テオドールという名だった気がする。

試合開始の合図がけたたましく鳴り響き、私は一気に距離を詰めるに行く。

「俺は勝つんだ！」

そうテオドールは叫びながらコンクリート地面に思いっきり拳を放つ。

すると、見事にその拳が直撃した部分から地面にひび割れが入り陥没していく。

私はそれに一瞬だけ怯んだ。

相当な力なのが否応なく理解させられる。

相手は私と同じ、接近タイプだ。

その力は驚異だが相手は恐らくこのまま、私と真っ向勝負を仕掛けてくる筈だ。

出なければ、勝利は得られない。

つまり、自分から私の間合いに飛び込んできてくれる。

故に、接近戦では確実に勝てる私にとって同じ接近タイプは絶好の力モだった。

案の定、テオドールは私に向け突進してくる。

彼の拳が勢いよく飛んでくる。

しかし、その速さはとるに足りないものであった。

私はそれを確実に避ける。

私を捕らえる事の出来なかった拳は地面に深々と突き刺さる。

テオドールはすぐに拳を引き抜き、追撃を行ってくる。

一発でも貰えば即ノックダウンだが、どれも遅く単調な攻撃で避けるのは容易かった。

すぐに私は理解した。

コイツはどうしようもないド素人だと。

「あんだ、今まで勝った事ある？」 私は必死に攻撃を続けている
テオドールに対して平然と質問する。

「一回もねえよ！」

彼は私の挑発的な態度が気に食わなかったらしく、さらに攻撃の
勢いを増して襲いかかってくる。

それでも、彼の拳が私に届く事はなかった。
何ともお気の毒なことだ。

それからどれほどの時間がたっただろうか。

既に彼の体力は限界に近づき、ただでさえ遅い拳の勢いはさらに
落ちていき、最後には肩で息をし始めまったく動けなくなっていた。
私はいつでも彼を仕留められた。

それをしなかったのは彼が『リーチ』だったからだ。

その言葉が私が彼のトドメをさすのを躊躇させていた。

しかしどの道、彼が私に勝つ可能性などもはや全くの皆無だ。

寧ろこれ以上はもう、彼が哀れで仕方なかった。

私はこんなくだらぬ見世物の幕を引くことにした。

それだけが、私が出る唯一の情けだ。

私の右手が彼の頭に触れる。

彼は諦めたかのように、その手を受け入れた。

「……死にたくない」

彼の震えた声が私の鼓膜と心を揺らし始める。

顔には恐怖の色しか見えない。

その恐怖は私に向けてのものではないことは重々理解している。

恐怖の矛先は二度と目覚めることのない眠りへの恐怖。
誰しもが必ず受け入れなければならぬ絶望だ。

「そうね……私も死にたくないわ」

そう誰だつて死にたくはない。

私だつてこんな事はしたくない。

けれど、やらなくては私の願いは達成されない。

私は彼の命と私の願いを天秤にかけ願いを選んだ。

次の瞬間、テオドールの絶叫がコロシウムに響き渡っていく。

そして、テオドールは恐怖の中死んでいった。

転がる死体は実に無残な姿をしている。

恐怖は私にも伝染した。

焦燥感が自分の中を駆け巡っていく。

冷や汗が額に滲みだし、喉が乾きを訴える。

こんな感覚は久しぶりだった。

何かとんでもなく恐ろしいものが自分の体に纏わりつき絡まって

くるイメージ。

私はそれから逃げるように沸き上がる歓声と無残な死体が転がる

コロシウムから早々と退出した。

心の底から疲労を訴えている。

本当なら今すぐにでも眠りたい。

けれど、彼の最後の言葉が頭から離れず、それを許してくれない。

しばらく通路を歩いているとゴピテルが悲しそうな表情で私を待
っていた。

私は彼女の姿を見て一瞬安堵する。

「……終わったよ」

「うん、聞こえてた」

ユピテルが聞いたのは、恐らくテオドールの絶叫であろう。
私達はそれだけを言うと言で無言で歩き出した。

沈黙が私達を支配し始める。

私は前にもこんな雰囲気ですピテルと歩いた事があったのを、ふ
と思い出していた。

「ヨル、デザート食べに行こう！」

タイミング良くあの時と同じように、ユピテルは沈黙を破り私の
手を引っ張り出した。

私は為されるがままにユピテルの後をついて行く。

ほんの少し、感謝を携えて。

どれほどの時間が経過しただろうか、疲弊しきった体に鞭を打ち
ながら私は走り回っていた。

白い息が私の口から空へと上っていき、儂く散っていく。

その時、かすかに彼女の声私の冷えきった鼓膜を響かせた。

私は必死に声のする方向を定め走る。

足が悲鳴をあげ、感覚が死んでいく。

それでも歩みを止めなかった。

そして雪の積もった切り株に泣きながら座り込む彼女をみつけた。

私は急いで泣きじゃくる彼女の元に向かい、そして力一杯抱きしめた。

彼女の体は氷のようにすっかり冷え切っていた。

私はずっと彼女の耳元で謝り続けた。

彼女は私に会えて安心したのか私の胸の中で眠りにつき始める。

しばらくその状態でいると、段々と空が晴れはじめ私達の周りに

暖かな日だまりが出来始めた。

私は彼女の顔を見つめながらは決心した。

絶対に彼女を一人きりにはしないと。

そう決心したはずだったのに私は今も此処に一人でいる。

それが堪らず憎らしい。

沈黙の回答

私とユピテルは貸し出しされている調理室の机でユヅキの作った水羊羹をがつついていた。

口に広がる程よい甘さが何とも心地良い気持ちにさせてくれる。その甘さが私の手を休ませることを許さないでいた。

「二人とも、そんなに急いで食べなくても羊羹は逃げやしませんよ」

ユヅキはそんな苦笑いでそう述べる。

私とてゆっくり味わって食べたいのはやまやまだが、少しでも、食べるペースを落とせばすぐに意地汚いユピテルの胃袋に水羊羹は全滅させられてしまう。

故に私は手を休める訳にはいかない。

そんなことを考えてる間に皿の上に大量に乗っていた薄紫の水羊羹は凄く速さで消えていく。

「もう少し、ゆっくり食べなさいよ!」そう言いつつ、さらにペースを上げるユピテル。

「それはコツチの台詞よ!」

私もまた、呼応するかのようにペースを速める。

ユヅキはそんな私達の姿を呆然と眺めているのだった。

そしてついに、皿には一切れ水羊羹が残される。

私は急いで竹串を刺すが、それと同時にユピテルの竹串も刺さる。

「……少しは遠慮しろ」

寛大な私もこればかりは譲れない。
睨みをきかしながら私は言う。

「そっちこそ」

ユピテルは小生意気に反論し、同じように睨みつけてくる。

お互いの眼光が鋭利な刃物のようになっていく。

一触即発の雰囲気の中、唐突にユヅキは私たちの間に割って入り、
皿の羊羹を綺麗に半分にした。

「半分こにしましょう」

和かな笑顔を振りまくユヅキ。

私達は呆気にとられてしまった。

彼女はただただ、笑みを浮かべ続けている。

「ま、ユヅキに免じて許してやるわ」

相変わらず、小生意気な口調で私の言いたい事を先取りするユピ
テル。

私は鼻を鳴らしながら半分になれた水羊羹を頬張った。

溶けるような甘さが口に広がっていき、幸福感が私を支配し始め
る。

これが最後の一切れと思うと、私はもっと味わって食べれば良か
ったと後悔するのだった。

一ヶ月程前に遡る。

その日は『外』から数名の新人が補充された。

そして私はその新人の内一人の世話役を命じられていた。それが私とユヅキの出会いになる。

「此処が今日からあなたの部屋だから」私は素っ気なくそう告げる。部屋は薄暗く私の部屋のデザインと何ら変わらないものであった。私が担当を命じられた新人は俯きながら、部屋に自分の荷物を置きにいく。

私はそれを外の廊下で見守っていた。

その新人は茶色のボブヘアで少したれ目の大人しい雰囲気を持った私と同じ年位の女性であった。

と言つてもこの施設内に生きる者にとって容貌は年齢の判断基準にはならない。

私の方が彼女より確実に年上である。

「お待たせしました」

彼女は荷物を置き終え、消え入るような声で私に報告してくる。その顔はどこか影が射し込み、暗い雰囲気醸し出している。当然な反応だ。

何もかもが未知の世界では平静な感情でいられる筈もない。

不安が常に心に付き纏う。

それでも私はあえて余計な言葉を吐きかけなかった。

「なら、次は食堂ね」短く告げ歩き出す。

彼女はそれに従いゆつくりと生まれたての雛鳥のようについてくる。

しばらく、私達は朱い系の道を歩いていると後ろを歩いていた彼女が口を開いた。

「あの……」

「なに？」 私は振り返らずに声だけで返事する。

冷たいかもしれないが、此処では皆が敵。

あまり馴れ馴れしく接するとこの子の為にならない。

寧ろ、私とユピテルの関係が異常なのであって、普通は此処にいる皆は友人などの親しい関係をもちたがらない。

何故なら、もしかしたらその人間と戦う事になるかもしれないからだ。

そうなった時、大事な場面で判断を誤るかもしれない。

故に私の態度はこの新人への親切心と言っても良いだろう。

「ヨルさんはいつから此処にいるんですか？」

何とも遠慮がちに聞いてはいるが、遠慮が無さ過ぎる発言だった。

もし、新人でなければ張り倒しているところだ。

私は無言で後ろの彼女に見えるよう人差し指を立てる。

「一年ですか？」

「十年よ」 私はため息混じりに教えてやった。

十年が経過した今でも私は此処にい続けている。

セピア色の記憶がゆっくりと脳裏を巡っていく。

重苦しい雰囲気さらに濃くなり彼女は無言になりだす。

「ほら、もう少して食堂よ」

私はその空気から逃れようとそう言い、その話題を終わらせた。此処も相変わらず、人がまばらに点在しており、ある程度賑わっていた。

後ろについてきている彼女を一瞥すると何とも暗い顔をしている。まるで私のせいで暗い顔をしている気がして気分が悪い。

「……お茶でもしていく？」 気がついたら、私は彼女を誘っていた。

私もまだまだお人好しだと改めて感じる。

だが、それは私の中にまだ人間くさい部分が残っている証拠でもあり、それはそれで良いのかもしれない。

彼女は何も言わず、ただ頷く。

「なら、適当な場所で座つて。注文は私がするから」

私はそう言い、彼女の側を離れていく。

すぐさま注文を済まし、品を受け取る。

トレイの上には湯気を立てた緑茶と紅茶が二つ、それとお茶菓手に羊羹と苺のタルトがあり、それぞれが対をなしている。

私はそのトレイを両手に持ち、彼女を探した。

「こっちです」

そう聞こえてきた方向に目をやると一番奥の窓際の席に彼女は座っていた。

窓は開放されており、そこから吹き込む風は少し肌寒い。陽光は雲に遮られながらも、微かに地表を照らしていた。

「お待たせ」

私はそう言い、彼女の向かい側の席につき、トレイを木製の机に置いて紅茶とタルトを渡す。

すると彼女は一瞬にして影を取り去り、はにかんだ。

「ありがとうございます」

彼女は礼儀正しく礼を言い受け取る。

ユピテルとはえらい違いだ。

アイツも少しくらい彼女を見習って謙虚になればいい。

「ちゃんと名前聞いてなかったわね。教えてくれる？」

良い機会でもあったので今さらながらそう訊ねると彼女は「ユツキです」と小さく答えてくれた。

ユツキという名前は私の出身地に多い名前だ。

懐かしい響きに私は少なくともユピテルという名前をよりずっと好感がもてた。

私達はお互いカップに唇をつけ、お茶を飲む。

口内に緑茶の深く旨みのあるふくよかな味わいが広がっていく。

そのまま、お茶菓子の羊羹を一口。

「美味しい」 無意識に言葉が漏れて私の心は天にも昇る気分になりしれている。

「ヨルさんは甘いものが好きなんですか？」 ユツキは紅茶の入ったカップを机に置きながら、問いかけてくる。

「甘いものって言うより和菓子好きって感じね」 そう、答えながら緑茶を飲む。

「調理室つてあります?」

「一応、あるわ。しかも、自由に使える」

ただし、誰かがその調理室を使っている姿など見た事もない。

と言つても私は食堂と自分の部屋を行き来する生活をずっと続けてきたので、それ以外の場は数える程しか立ち寄った事がないのでもしかすると私が見ていないだけかもしれない。

「なら今度、私が水羊羹作つてあげますよ」

ユヅキの言葉に私は耳を疑った。

彼女の信じられない発言が脳内を駆け巡っていく。

「ホントに!?!」 私はうわずつた声でそう問いかけてみると、ユヅキは初めて私に笑みを見せてくれた。

「私、お菓子づくりが趣味なんですよ。まあ宜しければですけど…」

その言葉を聞いた途端、彼女が輝いて見えて仕方なかった。

お菓子づくりが趣味だなんてどこの良家の娘だと心内で叫ばずにはいられなかった。

「じゃあ、近いうち頼むわ」

何とも可笑しな話だが、私は久しぶりに『楽しみ』という感情を思い出した。

人間は使用しないものや必要のないものはどんどん劣化していく。
だが、それは感情であろうと劣化するものなのだろうか。
もしそうなら、私はちゃんと人間でいられているのか少し不安になる。

私はそんな気持ちを流し込むようにお茶に口をつけた。

しばらくの間、お互い何も話さず、ただ座っていた。

私はふと、窓の外に目をやった。

白い雲がいくつもあり、少しくすんだ空の海が世界を無限に包んでいる。

だが、大地は大きな壁がそびえ立ち辺りを囲み、世界を遮っている。

壁の先にはどんな世界が広がっているのだろうか。

私が出た十年前の世界と今の世界はどう違うのだろうか。

『私達』が歩いた世界はまだ残っているのだろうか。

この狭い腐った囲いの世界から出たい。

そう思うと、私の心臓はどうしようもなく高鳴り始める。

「…………ヨルさんは外に出たいですか？」 私の視線と表情から読み取ったのかユヅキは問いかけてくる。

「ええ…………出たい」

正直な感情だ。

私はしっかりと彼女の瞳を見ながら答えた。

「どうしてですか？…………此処にいれば戦わなくてはいけません、
餓えに耐えなくてもいいし、服は好きなものが着れる、お風呂に好き
きただけはいれる、そして何より…………勝ち続ければ死を恐れなくて
済む」

ユヅキはどこか自分に言い聞かせるようにして続きを話す。

「私達は皆、一度は死んだ人間です。あの時は真つ暗で、自分が段々と認識出来なくなっていくのが堪らなく怖かった……だからこそ、私は不死者になりたい。もう二度とあんな思いはしたくないから」

ユヅキの気持ちは私にはよく分かった。

いや、此処にいる全ての人間が分かっている。

だから、皆戦うのだ。

今から何十年も昔の話だ。

世界は人口減少が進み、総人口は二十億にも満たずさらに減少傾向にあった。

種のアポトーシスと呼ばれる現象だ。

遺伝子に刻み込まれた呪いと揶揄される因子。

あらゆる病を駆逐した世界においても、それは私たちの奥底に根付いていた。

それを消し去ることは即ち、自身を消し去るのと同義。

このまま進めば人類は近い将来、確実に絶滅する。

それも自身の内発的に起こった現象によつてだ。

それはある意味で無自覚の自殺だと私は思っている。

世界はその無自覚自殺を阻止するためにある計画が発案した。

それがアブソリュート計画。

不死の人間を造りだし、人類を永遠のものにするという計画。

何とも二流映画並みの馬鹿馬鹿しい話だ。

だが、世界はそんな馬鹿馬鹿しい計画を本気で始めた。

最初にこの計画で作られたのは超越者と呼ばれる人造人間だった。

私も一度だけその姿を拝んだ事がある。

だが、それも完全な不死者ではなく欠陥品でしかなかった。

結局、彼らは兵器として利用される事になり、それが火種となり、世界は大きく乱れた。

だが、計画はそれでも動き続けていた。

そして、彼らはある一人の少女を見つけた。

その少女は他人には無い二十四番目の染色体を持っており、少女自身ある一定の年齢から成長が止まっていた。

その染色体こそ不死の染色体。

彼らはソレを研究し、死体を使った実験を行った。

その染色体が死体に埋め込まれた瞬間、死体は生者に戻り、特殊な能力を持つようになった。

誰もが、不死者の完成と思い、生き返った生者を何度か実験で殺してみた。

結果、生き返りは十回が限度であり、それ以上はもう一度、染色体を埋め込んでも復活しなかった。

つまり、これもまた不死者には至らなかったのだ。

この技術を使い娯楽としてロシアムが行われるようになったのはその後、すぐの事であった。

そう、私達は出来損ないの不死者。

そして、哀れな見せ物なのだ。

「……私を外で待っている人がいるのよ」

笑みを作りながらユツキの目を見て言う。

実をいうと、この事を誰かに告げたのはユツキが初めてであった。

「……そうですか」

何か考えているような顔つきで、長い間を挟みユツキは小さく言う。

そのままカップを両手で支え、ゆっくりと口をつける。

私もそれにつられ、湯飲みを手に取り口をつけた。
既にぬるくなった緑茶を一気に飲み干し、湯飲みを机に置く。

「その待っている人ってヨルさんにとってどんな人なんです……」

その言葉で私の纏っていた空気が変わった事に気づいたのかユヅキは途中で言葉を止める。

私はその言葉に対して選んだ答えは沈黙であった。

そればかりは私から口にする気は毛頭ない。

空気はどんどん張りつめていく。

そんな時であった。

『第一試合　ヨル　オボロ……』

タイミングが良いのか悪いのかスピーカーからは聞きたくもない
声が響いてくる。

だが、その音は私の心を逆に落ち着かせてくれた。

「ヨル……さん」

ユヅキは動揺を隠せず情けない顔をしている。

私はゆっくりと椅子から腰を浮かせユヅキの頭を軽く叩く。

「水羊羹……楽しみにしてるからね」

そう言い残し、私はコロシウムに向かう。

すると、後ろからは小さくユヅキの声援が聞こえてきた。

今後、敵になるかも知れない相手に声援を送るなんて仕方ない子
だ。

私はそう思いながら振り返らず手を振り、自然と笑みを作っていた。

戦いの前は必ず体が震える。

落ち着かせる為にひたすら息を吸っては吐くを繰り返す。

でなければ、震えて押し潰されそうになる。

本当は怖くてたまらない。

私は死ぬ事も怖いけど殺す事も怖い。

だけど、その恐怖が私が人間である事の証明でもある。

はたして後、四回これに耐え人間のまま外へ出る事が出来るのだろうか。

「耐えてみせる」

私は自分に言い聞かせるように独り言を呟き、歓声の飛び交うロシアムに足を踏み入れた。

愚者の拳

灌木がまばらに伸びる草原を私達は手を繋ぎ、歩いていた。赤茶色の色をした土の道は乾燥して細かくひび割れている。また、太陽が容赦なく照りつけ私の髪は熱がこもり、汗で濡れ始める。

それにより、雨粒のように私の頬から汗が滴り落ちていき、乾いた土を濡らしていく。

私達は目的もなく其処をさまよっていた。

見渡す限りの荒野。

私は彼女の手を決して離さず歩く。

乾いた世界には二つの影がユラユラと蠢いている。

等間隔で続く二つはぴったりと位置を揃えており、手と手はしっかりと握られていた。

そう、それは決して離してはいけないものだった。

今日の目覚めは珍しく良く、爽やかな気分になりながら私は朝食をとっていた。

器に注がれた味噌汁をゆっくりと味わいながら啜る。

やはり、味噌汁は美味い。

特にネギは必須品だと断言できる。

今日はこのまま何事もない平和な日になりそうな予感がした。だが、そのような予感を裏切るかのようにスピーカーから機械質の音が響く。

『第三試合 アクサナ ヨル……』

やはり私の気のせいだった。
人生はそれほど甘くは出来ていないのだと改めて実感し、同時に気が遠くなりそうになる。

「……よりによって赤目の女王様とはね」

ため息混じりの呟きを放ちながら茶碗と箸をトレイの上に置く。
アクサナという名を耳に入れた途端に爽やかな空気は一瞬にして消散していく。

朝食はまだ大量に残されているが一気に食欲が失せてしまった。

「赤目の女王様って？」

横から聞き覚えのある声が耳に入ってくる。

咄嗟に声のする方に顔を向けると、いつの間にか隣にはトレイを手に、座っている私を見下ろすような状態でユヅキがいた。

「それは私が説明するわ」 今度は後方から聞いただけで苛立ちを覚えるユピテルの声がしゃしゃりでてくる。

「……あんたらいきなり出てくんじゃないわよ」

「赤目の女王様ってのはね」

「無視かよ」

私の事を気にする素振りなどまったく見せずユピテルは続ける。

私にそのような態度をとるとは実に生意気だったが、流石に今からユピテルに制裁をくわえる気力はない。

仕方なく沈黙を選んだ。

「アクサナって奴の通り名の事よ」

ユヅキはいまいちピンとこないのか首を傾げている。

それは正に普通の反応だ。

ユピテルはそんなユヅキを見て言葉を足した。

「ようは、みんなしてソイツの事を女王って呼んでるのよ」

「何で女王なんです？」

イマイチ、納得出来ないのかユヅキは疑問符を浮かべた。

ユヅキの疑問はもつともだ。

だが、その理由は実に単純明快。

ただ、ひたすら強いのだ。

今までの戦績は八戦八勝の負け知らず。

そして、その殆どが瞬殺試合。

化け物じみたその強さを振りかざし、屍の王座を築き上げる。

挑んだ者は例外なく這いつくばり、強制的に地面と接吻させられる。

故についた名前が女王様。

ユピテルの説明に言葉が出てこないのかユヅキは黙り込み私を見つ

めてくる。

その瞳には哀れみや心配の色が露骨に現れている。

「……ヨルさん」

不安げな声で私の名を呼ぶユヅキ。

どうやら、彼女の中では戦う前から私の負けらしい。

私はその態度に少しだけ、腹が立ちユヅキにデコピンをしてやった。

「痛いですよ！」　小さく腫れた額を抑えながらつめくユヅキ。

「いい？勝つのは私よ」

そう自分の身を振り立たせるように断言し、席を立った。

骸の王座から必ず女王を引きずり下ろす。

そして、次の女王様はこの私だ。

腸の中を動き回る苛立ちを抑えながら、そのまま二人を一瞥して部屋に向かった。

部屋に戻ると私は早速ベッドの脇に放置していた銃と皮吊りホルスターを手にとった。

ソレは五十口径の黒光りしたシンプルな形をしており、明らかに対人用としては大きい。

ここ数年まったく使わずにいたものだ。

だが、整備だけはどれほど面倒であろうと欠かさず続けていた。これは私が外にいた頃から使ってきたもの。

自分の身は自分で守らなければならぬ外の世界にとってこれは唯一にして絶対に続けなければならぬ習慣

故に此処にいる間も続けてきたのだ。

いつか外に出る日のために。

恐らく、今すぐ使っても問題ない筈だ。

試合ルール上では武器の使用は禁止されていない。

現にユピテルがパチンコ玉を使うのがいい例だ。

私が今までコレを使わなかったのは単にコレがなくとも確実に勝てる自信があったからだ。

けれど、今回はそうも言ってもらえない。

果たしてコレがどこまで通用するかは分からないが、少なくとも外の世界で私の命を守り続けてきたこの銃を私は何より信頼している。

「頼むわよ……」

私は目蓋を閉じ、冷たい銃口に唇をつけた。
ひんやりとした感覚が過ぎり、今までコレを使ってきた記憶が巡っていく。

ゆっくりと目蓋を開く。

重苦しく重厚なその姿を確認し、ホルスターの中に仕舞い、それを腰に巻きつけた。

ゆっくりと息を吐き出し、私は部屋をすぐに出て、コロシウムに向けて足を踏み出した。

歓声が飛び交うコロシウムはいつも以上に不快だ。

客席側に設置された大画面モニターにはアクサナと思われる女のみが映されており、私など画面上のどこにもいない。

女王と名乗る割にはラフな動きやすい格好をしている。

その割に胸が大きく強調されていて実に不快な気分になる。

女王というよりは変態格闘家だ。

薄い茶色の髪は肩まで伸ばし、通り名通り瞳は血のように紅い。

切れ目の長い目元や、口許の勝気そうに引き締まった美しさが目につく。

私ほどではないが中々の美人だ。

「あなたが今日の挑戦者ね」

声が聞こえてきた。

刹那、アクサナは私の目の前にいた。

内心、驚きを隠せなかった。

少なくとも足幅十歩分近くは間合いが開いていた。

決して呆けていた訳ではない。

それでも、気がついたらすでに目と鼻の先にいるのだ。

恐らく奴の能力だろう。
焦りを見せると相手のつけ入る隙を与えることになる。
私はすぐに動揺を隠した。

「……ええそうよ。女王様」

大丈夫。

どんなに動きが速くても奴は所詮は接近戦タイプ。
私の敵ではない。

そう自分に言い聞かせる。

だがそれでも、アクサナから放たれるプレッシャーは凄まじく気圧
されそうになる。

伊達に女王と名乗っている訳ではないのが身をもって実感出来る。

「そう……それで、あなたは何秒もつてくれるのかしら？」 笑窪
をつくりながら挑発してくる。

「秒とはいつてくれるわね」

だが、その慢心が命取りになる。

勝ちを確信し、即座に手を伸ばしてアクサナの顔に触れた。
間違いなく私の勝ちだ。

次の瞬間、コロシウムにはアクサナの絶叫が木霊する。

筈だった。

当人であるアクサナは絶叫はおるか眉すら動かない。

「……嘘」

信じられなかった。

思考が現実を追いつかず理解出来ない。

「あなたの能力は発動しないわ」

その声で我に返り、慌ててアクサナから距離をおく。

逆に彼女の言葉が私の暴走した思考を鎮静させてくれた。

「……能力封じ」 私がそう呟くとアクサナは楽しそうに笑みを浮かべる。

「ええ、そうよ」

隠す気などさらさら無いのかすぐに白状した。

だがそれは私にとって絶望でしかなかった。

途方もない絶望感が心の器を満たしていく。

私が最初に想像した能力は何でもない。

ただアクサナ自身が尋常でない速さで距離を詰めただけであった。

私は思わず息をのむ。

明らかに動揺が見えているだろう。

アクサナの紅い目は細まり、意地悪そうな笑みへと変わっていく。

「もう一度、聞かぬ。あなたは何秒もつかしら？」

その言葉と共に殺気だった空気がヒリヒリと肌を感じた。

やはり持ってきてきて正解だった。

私は腰のホルスターから銃を取り出し、構える。

銃は凶器だ。

たった、20g程の弾丸を射出するだけのものだが、頭に当てれば確実に人を殺せる。

そして私はそれを所持し、アクサナは全くの丸腰。

端から見れば、圧倒的に私が有利。
だが、手に握られた銃はアクサナの前では頼りなく見えて仕方なかった。

敵にのまれては駄目だ。

私はその頭に言い聞かせ、唇を噛む。

気を取り直し、集中してアクサナを見る。

彼女のかすかにだか動こうとする素振りが見え、私は大きく後退した。

すぐに轟音と地面が碎ける音がけたたましく鳴り響き、先まで私がいた所には深々とアクサナの拳が埋まっていた。

「……テオドルが可哀相になってくるわね」

アクサナの力はテオドルとほぼ同じといった所だろう。

化け物以外に妥当な言葉が思いつかない。

だが、足の動きにさえ注意すれば遠間からの攻撃には対処は出来る。後は相手の動きに目を慣らすだけだ。

無論、アクサナの動きに慣れるまで私が彼女の猛攻から逃れる確証などまるでない。

「動きが止まってるわよ」

私が目を離れた瞬間を見逃さず、アクサナは距離を詰める。

すごい風圧を纏った拳が私の顔面に迫る。

私は咄嗟に首を曲げて避けた。

かすただけで倒れそうな勢いだ。

恐怖が脳髓を駆け巡っていく。

だが、此処に逃げ場は無い。

前が出るしかないのだ。

私は片手に銃を持ちながら拳でアクサナの横腹に向けブローを仕掛

けた。

しかし、アクサナはバックステップでそれを避け、右足を軸に回し蹴りをする。

風切り音と共にアクサナの足は私の鼻をかすめる。

私はすかさず、銃弾を放った。

瞬時に響く発砲音は淀んだ腐敗の空気を振動させいく。

発射された弾丸は熱と殺意をその身に纏いアクサナの額に向けて接近していくが、そう簡単には当たってはくれない。

数歩の距離だというのに銃弾は避けられ地面にめり込んでいく。

「中々の反射神経ね」

そう言つてアクサナは体勢をすぐさま立て直し懐に入り込んでくる。次の瞬間、私の腹部に強烈な衝撃が襲いかかる。

私の体はくの字に折れ曲がり、足が中に浮く。

一瞬、意識が飛びかけたが、すぐさま逆方向からも衝撃が襲いかかり引き戻される。

骨が碎ける音と共に私は地面に突っ伏してしまっていた。

激痛が頭のから体の先まで駆け抜けていく。

吐き気がこみ上げ、口をおさえて耐える。

「あら？まだ、意識があつたの」 抑揚の無い冷めた声が聞こえてくる。

私は必死に痛みを耐えながら立ち上がり、アクサナを睨む。

心臓の鼓動は急速に高鳴り、体が重い。

「……とうに一分は過ぎたわよ」

私は挑発的に言う。

しかし、アクサナはただ肩をすくめ笑っている。

「そうね……過ぎてしまったわね。まあ、構わないわ、結果は変わらないもの」

自分が負ける事など微塵も思っていない。

その態度がユピテル以上に鼻につく。

確かに、私は奴からしてみれば格下なのかも知れない。

だがここまで、私は舐められているのは我慢ならなかった。

痛みと吐き気は怒りにより抑制されていく。

私は拳銃をホルスターにしまい込む。

奴の土俵は私の土俵でもあるのだということを見せてやる。

「来なさいよ。馬鹿力だけの阿呆女」

私は挑発的な発言をし、指を動かす。

アクサナはその挑発にのって拳を真っ直ぐ私の顔面に向けて放つ。

私はギリギリまで引きつけ首をいなし、体を沈めるようにしながら

アクサナの腕に自分の腕を重ね十字を描く。

カウンターは見事に成功したと私は確信した。

「ふん！」

だが、アクサナは咄嗟に肘を曲げて十字を崩す。並みの人間では到底有り得ない動きだ。

「甘い……食堂のガトーショコラより甘いわ」

そう言って、から空きのボディーを狙ってくる。

私はすぐに片手でそれを流し、肩をアクサナの首元に潜り込ませる。

「なら、あんたは芋羊羹よ！」

そう罵り肩を思いつきり上げ、顎を揺らしてやる。

その瞬間、アクサナは怯み動きが止まる。

この好機を見逃さず私はすぐさま、一歩分距離をおいてアクサナの耳元をピンポイントに狙う。

見事に拳は直撃した。

だが、アクサナはすぐに腕を大きく振り回し私を遠ざけようとする。

「こんな軽い……拳に」

アクサナは言葉を途中で遮り、足がもつれ始める。

立っていられなくなっただのか膝を地面につける。

無理もない。

私が放ったのは相手の三半規管を揺らすパンチで、余程のテクニクが無ければ成功しない高等技術。

どんな人間でもしばらくは平衡感覚を失い、立つことすら出来ない。無論、私には造作もない話だ。

この好機をみすみす逃す手はない。

「力だけが全てじゃないのよ！」

雄叫びを上げ、蹴りをアクサナの額に向けて当てる。

足に固いものがぶつかる感触をブーツを通して感じた。

アクサナの頭が地面に激突する

ノックアウト間違いなしの手応えだった。

アクサナの体が地面に突っ伏す。

先の汚名はこの一撃で返上だ。

私は心の中でガッツポーズをとった。

観客席ではどよめきと同時に大合唱が巻き起こる。恐らく、コイツらは私がここまで健闘するとは思っていなかっただろう。

だが、今立っているのは間違いなく私だ。

後はアクサナの脳天に銃弾をぶち込むだけで終わる。

ホルスターから拳銃を取り出しながらアクサナに近づく。

それに連れて、観客席からはアクサナに罵声や声援を叫ぶ声が大きくなっていく。

無駄だ。

あんたらの女王様はもう立てはしない。

これからは私が女王だ。

そう思った矢先だった。

アクサナは何の素振りも見せず上半身を起こした。

額から流れ出る血は顔を伝って服に染み込んでいる。

相変わらず、彼女の表情は意地悪そうな笑みをしていた。

「……いいわ、あなた」

ゆったりと息を吐きながら立ち上がりほこりを払うアクサナ。

そのまま袖で額からでる血を拭う。

既に出血は止まっており、小さな傷跡が残るだけだ。

「額の生え際って傷の割に結構、血がでるのよね」

余裕な態度で額をさするアクサナ。

私はその姿を黙って見ているしかなかった。

渾身の一撃がああ程度で済むなんて冗談でも笑えない。

「さてと……中々、面白いことをしてくれたわね。あれは正直、驚いた」

ジリジリと近づきながら語り始める。

私はそれに呼応するかのように後ろへ下がった。否、下がらずにはいられなかった。

先程までの勝利の確信が一瞬にして遠のき、代わりに形容しがたい恐怖が姿をちらつかせ始める。

「……普通なら立てるはずないんだけど？」 下がる。

「普通じゃないもの」 迫る。

「正直、ショックね。規格外にも程があるわ」

壁は私が引くことを許さない。

コンクリートの冷たい感触が背中を過ぎていく。

「それは誉めてるのかしら？それとも……」 目と鼻の先にアクサナがくる。

「貶してるのかしら！」

目にもとまらぬ速さで拳が真っ直ぐに飛んでくる。

辛うじて、それを避けると私という的を外した拳はコンクリートの壁に激突する。

壁は当たった場所からひびかき入り、砂塵を巻き上げながら砕け散っていく。

休む暇なく、アクサナは壁から腕を引き抜き追撃を行う。

顎に拳が軽く当たった。

それだけで、頭を直に揺らされたような感覚が襲い来る。

「これはお返しよ」

動きが止まった私にもう片方の腕が迫る。
私は動くことが出来ず、耳元に攻撃を受けてしまった。
その瞬間、大きな耳鳴りと骨が砕け散る音が確かに聞こえた。

「あん……がい、むず……かしいわね」

アクサナの口が動き、何かを言っている。

だが、あまりの耳鳴りに聞き取ることが出来ない。

激痛が頭をぐるぐると回転しているようだ。

吐き気がこみ上げてくるがそれを抑える。

こんな所で吐くのは御免だ。

だが、とても立ってはいられない。

膝を地面につき、耳をおさえる。

耳からでた出血は相当な量であった。

流れでた鮮血は手をアクサナの瞳のように染めあげる。

これは鼓膜を破られた所の話ではない。

完全に片耳は潰された。

これが試合中に回復することはまず有り得ないだろう。

致命的だ。

「もう……何も……」 アクサナの声は蚊が鳴いているようにしか聞こえない。

観客の歓声はまるで雨音のようだ。
鬱陶しくて仕方がない。

「……………だ、う……………」

「もつと、大きな声で話さないよ……全然、聞こえないのよ」

私がそう言うと、アクサナは嬉しそうに顔を歪める。

その後は一方的なゲームだった。

重い拳が否応なく襲いかかる。

本当ならすぐにでも殺せた筈だ。

にもかかわらず、アクサナは寸前のところで手加減をしてくる。

まるで、じわじわと獲物である私を追い詰めていくことを楽しんでいるように思えた。

アクサナの体には私の血が大量に飛び散っていく。

雨はさらに激しさを増していく。

この雨はとて不愉快だ。

聞いているだけで嫌気がさす。

気に入らない。

今、私を殴って楽しんでいるこの女も、その光景を見て犬のように興奮している観客も、そして一方的にやられている私も、何もかもが気に入らない。

「…………弱すぎて飽きたわ」

私の首根っこを掴まみながらアクサナはため息をつきながら吐き捨てる。

声はなんとか聞き取れるようになってきた。

しかし、私にはこの無礼な発言に対して何も反論できないでいた。

もう、そんな気力も枯渇した泉のように無くなっている。

私の体はアクサナの力で支えられていた。

腕は力なく垂れ下がり、視界が霞む。

何だかとても眠い。

もう、面倒くさいし、このまま寝てしまえば楽になれそうな気がする

る。

「……これで終わりにしてあげる」

首を凄い力で圧迫される。

ミシミシと骨が軋み、血管が浮き出てくるのが分かる。

体は強張り、気管は締め付けられ息が苦しい。

段々と体に浮遊間を覚えてくる。

たまらず唾液が口からこぼれ出し、目が裏返しになりそうに引っ張られる。

その時だった。

力の抜けた手にホルスターに収納していた拳銃が触れた。

その瞬間、朦朧としていた意識が微かに戻る。

私の命を何度も救ってくれた銃。

歯を食いしばり気合いを入れる。

先まで、まったく力の入らなかった手に血が通い始め、心臓が高鳴りだす。

ホルスターから銃を抜き、引き金を引いた。

放たれた銃弾は硝煙と爆音に包まれ、アクサナの腹部に噛み付いた。

その瞬間、アクサナの力は抜け、持ち上げられた私の体は地面に叩きつけられる。

息が出来ない苦しみからは解放されたが、肺は空気を求め大きく膨らむ。

それでも咳が止まらず、血が口から零れだし、息が整わない。

だが微かに聞こえるアクサナの呻き声が私の勝利への確信を再び蘇らせた。

最後の仕上げはまだ終わっていない。

私は棒のようになった足を引きずりながら拳銃をアクサナの眉間に突きつける。

アクサナは発狂したかのように髪を荒げ、目をむきだしにしていた。

相当、苦しいのだろう。

当たり前だ。

まして、この銃は対人用では最も破壊力がある。

普通なら上半身が吹き飛び即死だ。

アクサナはコンクリートの地面に爪をたてるように引つ掻き回して、吐血している。

私はお前のように苦しんでいる人間をいたぶるようなサディストではない。

「……覚えておきなさい。人間って弾丸を頭に撃ち込まれたら死ぬのよ」

喉を潰されたせいかわ声はかすれていた。

まあ、聞こえただろう。

間髪をいれず、引き金を引く。

弾丸はアクサナの頭に直撃し、スイカが割れたように爆せる。

灰色の物体が地面に飛び散り、硝煙の甘い香りが広がっていく。

勝利。

その言葉が頭を過ぎり、仰向けに倒れる。

いつの間にか、騒がしかったあの雨は止んでいた。

青い海に触れながら、私達は歩いていった。

真っ白い砂浜は歩いたたびに音をならし、海鳥は気持ちよさそうに鳴きながら空を泳いでいる。

海は穏やかで、小さな波が幾重にも重なって打ち寄せてくる。

塩の香りが私達を取り囲み決して離れない。

だが、それに嫌な感じはない。

風は強く吹き始めた。

彼女の被っていた白い帽子が潮風にのって飛んでいく。

そのまま、帽子は海に落ちていく。

彼女は必死に帽子を取りに行こうとする。

私はそれを止めようと彼女の手を強く握り、胸元にまで引き寄せた。

彼女は泣いてせがんでくる。

あの帽子は私が初めて彼女に買ってあげた物だった。

特に高価な物ではなかった。

いつでも同じように物は買える。

そう説明したが、彼女は諦めてはくれなかった。

帽子はどんどん、沖に流されていく。

私は仕方なく海に飛び込み、帽子を拾いに行った。

濡れた帽子を絞るように捻り、塩水を払う。

私は「もう二度と無くさないでね」と囁き、帽子を彼女に手渡す。

彼女は帽子を大切そうに抱きしめ、私に礼をいう。

そして、私達はまた歩きだした。

砂と海の世界はまだまだ続いている。

夢の旅人

嗜虐と興奮が入り乱れる世界。

敵の体が私の手から離れ、力無く地面に沈む。

勝利の余韻もなければ殺しの罪悪感もない。

あるのは虚無感のみ。

不愉快な歓声は止むこと知らず、つんざくように耳を通り抜けて木霊していく。

私はその音に嫌悪感を心に秘めながら場を去る。

「こんな世界……消えてしまえ」

誰にも聞こえないようにしながら、吐き捨てる。だが、私がどんなに強くそう思ってもあの狂った世界が消える事は無い。

後、一勝。

それでこのふざけた茶番劇も終わる。

そしたら外に出る。

私がこの十年の間、強く思っていたのはそれだけだ。

その願いも時期に叶う。

荒れた大地に青く広がる空。

緑の森林に白い海、甘い風に桃色の香り、緋色の夕陽に黄色の月、

そして灰色の街に黒い人間。

醜くい、けれど美しい、陽だまりのような暖かい世界だ。

「あと少し……」

重い足取りで私は自室へと戻ってきた。

すぐにベッドから発せられる甘い誘惑に導かれて身をあずけた。

私の体重で微かにベッドが軋む。

シートにはシワが波紋のように広がっている。
すぐに強烈な眠気が私の目蓋を襲った。

「もうすぐだからね……ノエル」

私は闇に囁きながら、重く沈む目蓋を受け入れた。

気がつけば私達は逃げまどっていた。

徐々に何者かの足跡がひしひしと闇夜に包まれた夜の森に響いている。

すぐそこまで追ってがきているのが分かる。

何かとんでもなく恐ろしいものが自分の体に纏わりつき、絡まってくるイメージだ。

体は敏感にその『何か』を察知していた。

漆黒の空間が果て無く広がり、幾つもの眼球がしきりに、こちらを見つめている気がしてならなかった。

私は必死に急かした。

だが、ガラス細工のように繊細なノエルではすでに限界だった。

ブロンドの髪を激しく揺らしながら華奢な体は疲弊しきっている。

ノエルは肩で息をしながら自分を置いていけと私にせがんでくる。

私はそれを拒否した。

絶対にそれだけは許さない。

ノエルが限界であるというのなら私は闘争を選ぶまでの話だ。

腰のつり革に下げていた銃を私はすぐさま取り出した。

幾度として私を守ってきた漆黒に輝く砲身は私の心を乱していく。

闇が徐々に私達を囲む。

私はその銃口を何者かに向ける。

一発の銃弾を殺意と牽制を混じえて放つ。

静寂の森はその一瞬でざわめく。

反動が私の肩を叩くのと同時に、火薬の甘い香が舞う。

さらに間髪を入れずにもう一発を放つと火花が闇の中で煌めく。

その間、彼女は私の腰もとにしがみつき震えていた。私が逃げる事は許されない。絶対に。

「……東城 夜だな」

闇から男の低い声が聞こえてくる。

月明かりが辺りを照らし始め、その声の持ち主の姿が目映る。鳥の仮面。

灰色の鴉だ。

『ヤタガラス』と呼ばれる犯罪組織。

この組織のメンバーは皆、鳥の仮面を所持し、この組織のリーダーは灰色の鴉の面を被っているという。

目の前にいるこの男からは強烈なプレッシャーが放たれていた。

「……夜」 ノエルは震えた声を出しながら、小さな体を私に寄せつける。

「大丈夫よ。……で、あなたは一体、私達に何の用？狙われるような覚えはあんまりないのだけれど」 ノエルをいつでも守れる体制を取りながら、警戒を緩めずに問う。

「そのガキに用は無い。あるのはお前だけだ、東城 夜」

ただ、それだけを述べると鴉は歪に曲がったナイフを構えだす。

月光がナイフの光沢に反射し、危うい美しさをさらけ出す。

明らかな殺意が澱んだ空気と混じっていく。

黒い戦慄が背中を過ぎり、緊迫感が訪れる。

瞬きひとつ許されない。

少しでも緊張を解けば、すぐにあのナイフが首をかき切ってくるだろう。

嫌な汗が湧き出してくる。

「目当ては私ではなく、『アレ』でしょ。悪いけど私の手元には無いわ」

「なら何処にある」

「そんな事を言うつても思っているの？」「すぐさま、拳銃の引き金を引く。」

爆音が木霊し、空気を揺らす。

森はさらにざわめきを増し、風が呼応するかのように木の葉を揺らす。

「私が時間を稼ぐからノエルは逃げなさい！」

ノエルは首を必死に振りながら拒否をする。

鴉は銃弾を簡単に避け、ゆっくりと土を踏みながら迫ってくる。

その足音が私に迫るたびに心臓は異常なまでに高まり、息苦しくなってくる。

何度もこの感覚を味わったことがある。

死が身近に迫ってくる感覚だ。

私はその感覚を払拭するよう再度引き金を引く。

「大丈夫……あの丘で待つてなさい。必ず行くから」優しくノエルに囁き、一瞥しながら帽子を被せてあげる。

そして、私は彼女の手を離した。

ノエルは泣きながら夜のトバリを走り出す。

すぐにその姿は夜の森の幽寂の中に溶けていった。

それを確認し、私は安堵する。

私はここで死ぬかもしれない。

それは、もう逃れられない現実。

だが、ノエルが無事ならばそれで構わない。

私はもう一丁、ホルスターから拳銃を取り出す。

だが、ただでは私の命はやるものか。

二丁の拳銃が火を吐く。

緋弾は真っ直ぐに鴉に向かう。

しかし、鴉はいとも簡単にそれを回避し、もうスピードで迫ってくる。

瞬時に歪なナイフが私の喉元に風切り音を鳴らしながら迫る。

私はそれを拳銃の砲身で防ぎ、もう片方の銃口を鴉に向ける。

その瞬間、横腹に強烈な衝撃が襲いかかってきた。

体がその衝撃により吹き飛ばされ大木に体を叩きつけられる。

何をされたのか分からなかった。

だが、確実に肋骨をもってかれた。

苦痛で顔が歪む。

歯ぎしりをしながら、必死に耐え銃弾を放った。

銃弾の衝撃が体に響きさらに痛みを助長させる。

しかし、またも銃弾はハズれた。

いくら手負いでもこの距離で当てられないほど私の射撃は甘くない。

私はすぐに違和感を覚えた。

「気づいたか」

鴉の小さいが鋭い声が耳に突き刺さる。

その気に入らない仮面の下ではきつとほくそ笑んでいるに違いない。

「俺にそんなモノは当たらない。絶対にな」

鴉はそう言うが、私は構わず撃つ。
そして、真っ直ぐに飛んでいった銃弾は鴉に近づくにつれの外れな方向へいく。

どうやったかは分からないが軌道をズラされているようだ。

「厄介ね……なら、コレならどう!？」

私はあちらこちらに点在している石や岩に目掛けて撃つ。

当たった弾丸は岩に弾かれ反射する。

そして、その反射した弾丸をさらにもう一丁の銃で狙い撃つ。

すると金属が弾けあい、鴉の周りに火花が散る。

その火花を纏った弾丸が鴉の体に食い込む。

「ぐっ……」カラスの体は森の大地に崩れる。

血が体の隅々から流れ出している。

もう、動けないだろう。

「戦いにおいて、油断は死を招く。そんな事も忘れたの?」

この男がその気になれば、私など瞬時にと殺せただろうに。

そう思いながら、銃口を仮面に当てる。

「怨むなら自分の間抜けさを怨みなさい」

銃声と共に闇の森が血に染まった。

仮面は碎け、鴉は死んだ。

疲労感が溢れ興奮を抑制していく。

その瞬間、体は痛みを思い出し、思わず顔をしかめてしまう。

私は震える手でホルスターに拳銃をしまう。
早く行かないとノエルにまた泣かれてしまう。
私は疲れた体に鞭を打ち走りだそうとした。

「そうだな……次から気をつけるとする」

その声と共に頭に激痛が走る。

理解など追いつくはずもなかった。

私の胸から手が飛びだしている。

そして、その手には赤い小さな心臓が優しく握られていた。

「……ウソ」

有り得ない。

全てが有り得なすぎる。

どうして、私の胸から手が飛びだしているのかが痛みよりも先に私の脳裏を駆け巡りパニックを引き起こす。

どうして、私の心臓が握られているのだ。

どうして、死んだはずの人間が生きているのだ。

様々な疑問が頭の中を何度も何度もグルグルと回り続け、声を出そうにも息一つままならないでいた。

体に張り巡らせている神経がどんどん消えていく。

生々しいまでのリアルな死。

そう死が近づいてくる。

「この体になつてからの『悪癖』だ」

首を必死に曲げて奴の顔を見る。

異常なまでに崩れた笑み。

狂った顔とはこの事を言うのだろうか。

段々と視界が霞む。

まるで、霧が立ちこめてきたように視界が狭くなる。

「思わずやつちまったが……まあ、良いかコイツの死体をもっていけば」

そう結論づけると先まで活発に動いていたのが嘘みたいに弱々しい心臓に爪が食い込む。

セピア色の記憶が巡る。

私が育った島の景色。

銀色の大地を共に歩いた記憶。

灌木だらけの乾いた大地を共に歩いた記憶。

青い海と白い浜を共に歩いた記憶。

そして、最後に浮かぶのはノエルの泣いた顔。

「俺が『次に』死ぬまでお前の事は覚えておいてやるよ……」

刹那、私の目の前で私の心臓は砕け散っていった。

頭に過ぎる、ノエルの顔が笑みへと変わる。

私は呆気なく死んだ。

闇からの視線に私は目を覚ました。

寝汗で湿った髪が億劫な気分をさらに膨らませる。

久しくこの視線は私の元には来ていなかった。

「……何の用？」

私は闇に向けて一瞥もせず問いかけた。

闇は何も答えない。
苛立ちが私の中で煮えたくる。
私に何を望むというのだ。
はつきりしない存在が私は一番嫌いだ。
長い沈黙が闇と私の間を行き来する。

「ヨルは楽園から出ていくの？」
「よつやく帰ってきた言葉はどこか寂しげであった。」

私はその問いに答えなかった。
否、答えたくなかった。
私の内包するものを晒すことは絶対にしなくなかったからだ。
誰にも告げることはない。
必要もない。

私は唇をかみしめながら闇からの視線に耐えた。

「寝ちゃったの？」

闇は言葉を吐きかける。
それでも私は沈黙を続けた。
視線を向けなくとも闇が今、どのような顔でいるか容易に想像がついた。

だからこそ、私はそれが見たくなかった。
それを見てしまうと私の決意が揺らぐような気がしたからだ。

「おやすみ……ヨル」

その言葉を最後に闇からの視線が薄れていく。
私はそれが完全に消えるのを待ってから息を吐き、ベッドに仰向けとなつて天井に手をかざした。

横にある淡い色のカーテンの隙間から月明かりが射し込む。
朧気に輝く三日月は静寂の夜に相応しい。

夜には月が無くてはならない。

ノエルは私という『夜』に浮かぶ月そのものだった。

やっただ。

やっど、手の届く所まできたのだ。

拳を強く握りしめる。

「あと、少しだからね……ノエル」

吐息と共に吐かれる私の思い。

どうか、彼女にこの思いが届きますように。

そう夜空に浮かぶ月に願う。

その間、闇の悲しそうな顔がどうしても離れなかった。

「…………おやすみユピテル」

私は消え入るような声でそう呟き、眠りの森へと向かった。

夜のシラベ

最早、爆音に近い歓声に空気が揺れる。

耳障りな音だ。

私とユヅキはその淀み揺れていく空気の中にいた。

「……私は本当に悲しいですよ」 ユヅキは節目がちにそう告げる。

「……そうね、最後に殺す相手がユヅキなんてね」

私もその言葉には同意だった。

出来ればこうなりたくは無かった。

もし、こうなることが分かっていたのなら、あの時、私は彼女に声をかけなかっただろう。

だが、そのような仮定の話をしても意味はない。

それにどれほど後悔しても彼女と過ごした一時に私は救われていたのも事実だ。

それでも後、少しなのだ。

たとえその救いを手放してでも私は絶対に引けない。

それがユヅキを殺すことであっても。

「可笑しな事を言いますね。ヨルさん、私は負けませんよ」 ユヅ

キの目つきが今まで見たこともないような変化を見せる。

ピリピリとした殺気が肌を刺す。

一筋縄ではいかないのがその一瞬でよく分かった。

「あなたを外へは行かせない！」

そう叫びながらユヅキは手を地面にかざす。すると、地面は白亜色に凍結し始め冷気がユヅキの周りを包みだす。さらにその冷気はコロシム全体に広がっていく。恐ろしいまでに冷たい空気が私を取り巻くのが分かる。私の口からでる白い吐息は周りの空気に混じり見えなくなっていく。いつの間に地面は銀色に染まりだしている。霜のようだ。

「本当に一筋縄にはいかないわね」

これだけ、冷たい空間では銃などすぐに、使い物にならなくなる。今のうちに使わなければただの飾りだ。

「行きますよ」

走り出すユヅキ。

接近してくるなら好都合だ。

私は直進してくるユヅキに向け、銃を放つ。

火花を散らしながら冷たい空気を切り裂いていく弾丸。

狙いは完璧だった。

にもかかわらず銃弾はユヅキに近づいた途端、突如として軌道を変えてあらぬ方向へと飛んでいく。

「無駄ですよ！」

ユヅキの手刀が私のすぐそばまで迫り、私はそれを銃の砲身で防いだ。

すると黒い砲身は瞬時に凍てつき始め、冷たい痛みがすぐに手へと迫ってきた。

私はすぐさま銃を手放し、ユヅキから距離を置こうと後ろに跳躍す

る。

その時、自分の体に異変が訪れている事に気がついた。体の反応が明らかに遅いのだ。

関節が固く感じる。

結局、たいした距離は開けられず、私は片足で踏ん張りを聞かせながら追撃してくるユヅキ目がけて蹴りを放つ。

無論、私のノロマな蹴りはユヅキに当たる事なく空を切った。

失念していた。

これだけの低温だ。

体が冷え切って反応が鈍くなるのは当然のことだ。

「動きづらいでしょう？」 ユヅキはしてやったりといった顔をしている。

明らかにユヅキの動きは常時と変わらない。

否、むしろそれ以上に軽やかに動いている気がする。

私の見立てが正しければ状況は芳しくない。

「熱を操作出来るのね。だから、あんたはこの状況でも全快の状態で動けるんでしょ」 私は手首や足首の関節を回しながらユヅキに訊ねる。

「ええ、その通りです。先の銃弾も空気中の熱量を急激に変化させ、気体の膨張と凝縮を利用して弾の軌道をズラしました」

ユヅキはあっさりと肯定し、あろう事かご丁寧に解説までしてくれる。

その余裕には全くもって恐れ入る。

だが、事態は予想通りだ。

ユヅキの体は万全な状態でキープされている。

それに比べ、ただでさえ接近戦でなければ勝ち目の無い私が銃を失い、さらにこの様では洒落にならない。

だが、一つだけ私にアドバンテージがある。

それはユヅキがまだ私の能力を知らないこと。

それだけが救いだ。

自ずとチャンスはくる。

私はそれを待つべく守りに徹した。

だがユヅキの猛攻につけ入る隙は中々、見つからない。

冷気を纏った手刀が幾たびに襲いかかる。

私の皮膚に切り傷が入るが凍結して血は流れ出ない。

手はかじかみ、感覚が消えていく。

ユヅキがここまで強かったとは正直なところ予想外だった。

案外、勝ちを譲ってくれるのでは、と試合前に甘い考えをしていた私を殴り倒してやりたい気持ち湧き上がってくる。

ユヅキは勝ちを譲るはおろか、私を殺す気で始めから挑んでいた。

しかも、私を外へは行かせないとまで言い切った。

私が外に出ることを望んでいるのを知っているくせにだ。

「まったく……しょうがない子」 小さく、そして、優しく呟く。

ユヅキの可愛く、いじらしい我が儘。

心が揺れる。

それでも、私は行かなくてはいけない。

それが、私とノエルとの約束だからだ。

「これで、終わりです！」

もう私が動けないと踏んでか、真っ直ぐ心臓を目掛け突き刺そうと腕を伸ばしてくる。

ユヅキの手刀は正に冷気の手鎚だ。

触れた瞬間、凍結して粉々に砕かれる。

だが、そんな事は関係ない。

触れた時点で私の勝ちなのだから。

私はユヅキの腕を寸での所で掴む。

「な！」 思っても見なかった反応に驚きを隠せないユヅキ。

「……………ゴメンね、ユヅキ」

その刹那、震えた唇を動かし話しかける。

私の声はユヅキに聞こえただろうか。

できれば、聞こえていて欲しい。

冷たい空気に悲しみが木霊したのはその後、すぐであった。

ぐったりと倒れるユヅキの体。

本当に一瞬で終わってしまった。

罪悪感と虚無感が交互に私を責め立てる。

彼女の頬には冷たい涙が流れていた。

コレが痛みの涙なのか悲しみの涙なのか、それは分からない。

ただ、私は優しくユヅキの冷たい頬を撫で涙を拭いた。

その瞬間、気のせいだろうか彼女が微笑んでいるように見えた。

微かに頬が緩む。

「じゃあね……………ユヅキ」 子供に子守歌を聞かせるように優しく語りかけ、彼女の顔を記憶に焼きつけて私はその場を去る。

コロシアムに残されたのは狂喜と興奮の嵐。

そして、ユヅキの優しい姿だけであった。

勝利した直後、私はコロシアムのさらに奥にある部屋に通された。そこから地下へと繋がるエレベーターに足を踏み入れる。軽く振動が起き、エレベーターの厚い扉は閉められ、地下へと潜り始める。

一定のリズムを刻む稼働音に耳を澄ましながら、私は感慨にふけっていた。

殺しの罪悪感と嗜虐な喜びが入り混じった世界。

そこに身を置き続けた私には自己嫌悪にも近いものがあった。

段々と慣れていく自分が嫌でたまらなかったのだ。

そんな世界で唯一の救いが彼女たちだった。

自然と目に涙が溜まっていき、こぼれ落ちていく。

「どうして泣いてるんだろ……」

私は何度も夢見てきた。

もう一度、彼女と会うことばかり考えてきたのだ。

ようやくそれが叶う。

嬉しい筈なのに悲しくて仕方ない。

エレベーターはまだ到着する気配を見せない。

せめてこの間だけ、そう言い聞かせながら私は声を殺して泣き続けた。

到着する頃には涙はすっかり枯れてしまっていた。

重苦しい扉が開き一本道が姿を現す。

それに従い、真っ直ぐに進んでいくと一つの扉が出てきた。

私はそれに手をかけてゆつくりと開く。

その部屋は白い壁に覆われ、死角は一切存在しない。

二つの椅子が置かれているだけで他には何も無い無機質な部屋。シエルはひとり其処にいた。

「さて、お前は十勝した。外へ行くのかそれとも此処で永久に暮らすかどちらを選ぶ?」

開口一番にシエルはそう言っただけで私に椅子をすすめる。

私は目の前に置かれた椅子にゆっくりと腰を下ろした。シエルは私の答えなど分かっている。

「あんたみたいに此処で怠惰に暮らす気はさらさらないわ」私は若干の皮肉を混じえてそう答えると、めったに笑わないシエルが笑みを浮かべる。

「だろうな……俺は此処に安息を求めた。だから、こうしている。だがな……段々と自分が何処か遠くへ消えていくんだ。死から……自分が消えて無くなるのが怖くて逃げ出した結果がコレだ」

私は静かにそれを聞いた。
本当に滑稽で愚かな話だった。
それでも、私は聞き続けた。

「お前は死が怖い……いや、愚問だったな。怖くない筈がない。死を怖れなくなつた時点でそれはもう人間ではない。……俺は今でも此処に残つた事を後悔しているよ」

「外も変わらないかも知れないわ」私がそう言つと、シエルはそれを真つ向から否定した。

「外には死が満ちている。外の人間はそれと向き合いながら生きて

いる。だから、彼らが純粹に生をまつとうした時、とても安らかな顔をするんだ。此処には無い美しさだ。俺はその美しい姿を見たい、そして願わくばその姿で死にたい。もう、手遅れだかな」

彼の独白は私の心に燦る何かをしきりにつついた。形容し難い気持ちが胸いっぱい広がってくる。

「人は支配するのを望み、そして他人にそれを強要する生き物よ。支配することで安心を得ようとする……私がそうだった。外では毎日がその繰り返し。誰かが誰かを支配する。それは、此処も同じよ」

私は不安だったのだ。

そして不安を埋める何かにノエルを選んだ。

私は彼女を私のエゴで支配し続けてきたのだ。

「みんな死に支配されている。死という絶対の終焉の前に恐れをなし安寧を求めようとする。でもそれって、決して悪いことではないと思う。だって、みんな生きていたいと思うもの……どうにかしてそれを避けたいと思うのは当然。だから私はあんたの選択はそれで正しいと思う」

どちらを選ぼうと大差はないのだ。

人である限り、死という恐怖からは逃れられない。

たとえ私たちのように中途半端な不死であろうと脳裏には必ずそれが焼き付いている。

なぜなら既に一度、体験しているからだ。

自身を認識するものが消えていく。

それでも世界は何事も無かったかのように過ぎていく。

まるで初めから私の存在など無かったかのように。

恐ろしい。

だが、終わりがあるからこそ、人は何かを残そうと必死に行動する。それは芸術であったり、競技のきろくであったり、それは人それぞれだ。

だが、死の支配が存在するからこそ文化は生まれ育まれていく。みんないつかは死ぬことを私たちは生まれてすぐに知っている。

その支配が私たちに生きる意義を探させる原動力となるのだ。外も此処も変わりはない。

私たちが人間であることに変わりはないのだから。

「それでも男は死に様を重視するんだよ」 シェルは笑窪をつくりながら言う。

「はいはい、そうですね」

そして、私達は二人で大いに笑う。

此処に来て初めて心の芯から笑えた気がした。

その後、手続きを済まし私は部屋に戻ってきた。すぐさま私物をまとめ部屋を出る準備を始める。

傷ついた私を優しく向かい入れてくれたベッドよお前の事は忘れない。

その思いを胸に秘め、荷造りを済まして部屋を出ていく。本当にこれが最後となると少し心が揺らいだ。

外に続く螺旋階段をゆっくりと降りていく。
一歩ずつ足を踏み出すたびに十年という歳月がセピア色に蘇ってくる。

数十分もすると外への出口が目の前に現れる。

大きな扉だ。

黒い重圧を放ち気品を感じる。

だが、その扉の前には気品の欠片も感じられないユピテルの姿があった。

「……ヨル」

その声は明らかに震えていた。

目元は腫れ上がり涙が溜まっているのが遠目からでも分かる。

らしくない姿を晒すユピテル。

調子が狂う。

「何よユピテル、別れの言葉でも言いに来たの？」

本当は会いたくなかった。

一番会いたくなかった。

何のためにここ数ヶ月、ユピテルを無視をし続けたのか分からなくなってしまう。

「何だよ……もう、闘わなくていいんでしょ！」

ユピテルは私の問いかけに答えるわけもなく、癩癩を起こした子どものように騒ぎ始める。

ユピテルの声は私の耳をつんざき、あたりに拡散していく。

その声が私にはひどく苦痛だった。

「私だつてもうすぐ終わるし、そしたらずっと一緒にいられるじゃない！毎日、追いかけてこしたり、デザート食べたり、ゲームしたり、それから沢山……沢山」

ユピテルの声は段々と小さくなっていく。

涙がそれに比例するかのように溢れ出している。

どこまでも人の後ろ髪を引くような真似をする。

少しずつ、ユピテルに歩み寄る。

「……ユピテル」

「……行かないですよ。ずっと一緒にいてよ！」　ユピテルの思いが言葉にのって、私の胸を揺らす。

膝を曲げ、ユピテルの目線にまで顔を落とす。

そのまま、頬に触れ額を合わせる。

「私はね……あんたの事が時々、嫌いだったけど本当に好きだよ」

私は初めて、少しだけ本音を語った。

私はユピテルがいたからこの十年を耐えることができた。

始めはノエルの代用品にすぎなかった。

私はユピテルを支配して満足していたにすぎないのだ。

だが、いつの頃からか私の中でユピテルはそれ以上のものへと変わっていた。

ユピテルが笑う顔が好きになっていた。

ユピテルが怒る顔が好きになっていた。

ユピテルが泣く顔が好きになっていた。

一緒にいるだけで良かったのだ。

「……私もそう、本当に嫌いで仕方ない。だけど、大好き！」

ユピテルの震えた声が私に届く。

十年間、ほぼ毎日のように私はユピテルと顔を合わせていた。

そして、今日初めてユピテルの本音が聞けた。

私の心にその言葉を刻み込む。

それでも私は行かなくてはならない。

私の心が歩みを止めることを決して許しはしない。

「大丈夫……きっとまた、会えるから」

ユピテルの耳元で優しく囁きかける。

我ながら、何を言っているのだろうか。

そんな根拠がどこにあるのだ。

「……本当に？」

聞き返してくるユピテル。

涙が止まらない。

やはり、私も素直じゃない。

「ええ、絶対に」 震えた声はどこまでも私を惨めにした。

「……信じてあげる」 諦めに近いものを感じる笑いをユピテルは放ちながら言う。

彼女の微笑みは優しく温かい陽だまりのようであった。

私は強くユピテルを抱きしめる。

そして柔らかい彼女の温もりを私は体に教え込んだ。

いかに世界が真つ二つになっても離さないくらいに強く抱きしめる。
扉をゆっくりと開ける。

ギシギシと音たてた外の世界を私の目に見せてくれる。
正に灰色の世界であった。

悲しくも美しいその世界は私の心を強く掻き立てる。

背中にはユピテルの温もりがある。

ユピテルの鼓動は私の鼓動と同調しているかのように同じリズムを奏でている。

「……………行ってくる」

私は振り向かなかった。いや、振り向けなかったのだ。

今、振り向けば泣き崩れた顔をユピテルに見られてしまう。

それだけは絶対に見せたくない。

きつと、後ろにいるユピテルも酷い顔になっているだろう。

先から涙が私の背中に染み込んできている。

「うん……………行つてらっしゃい」

しゃっくり混じりのその言葉と共に温もりは離れていく。

それを合図に私は走り出した。

泣きながら、前へ。ひたすら、前へ。

ユピテルの泣き声が聞こえ、それでも、走り続ける。

そして、ひたすら泣き続けた。

あれから、どのくらいたっただろうか。

覚えていない。

ただ、私はひたすら走り続けていた。

靴がボロボロになり、底が抜けそうになっても走り続けた。

眠りにつくたびに夢を見続け、ユピテルの顔を思い出し涙が溢れてくる日々を繰り返す。

あの約束の丘を目指して。

そして、私は遂にたどり着いた。

緑鮮やかな草原。

見渡す限り、緑の丘が連なり夜空は綺麗に晴れ、月が輝いている。

流れ行く雲の合間から射し込む蒼白い月光が反射し、孤高の光を辺りに飛び交わせていた。

その光は昼間の太陽が照らしだす煌びやかな光とは違い、静寂で弱々しい、けれど心のザワメキをゆっくりと鎮静させていくような蒼と白銀の淡い光である。

風は少し肌寒く、私の頬をしきりに撫でていく。

仄かに甘い香りが私の鼻孔に入り込んでくる。

一本の大きな木が見え、そこに白い帽子を被った少女が見えた。

見間違っさがない。

間違いなくノエルだ。

やっと、会える。

やっと、話せる。

やっと、あの笑顔が見れる。

その気持ち私の疲れきった体に活力を与えた。

「ノエル！」

疲れきった体で声を張り上げる。

その瞬間、ノエルの姿は闇に溶けていった。

そして、木の下には十字架型の墓石が寂しくたたずんでいた。

私は一瞬にして、力がぬけてしまった。

全てが消え失せていくような感覚。

震えた体で墓石に迫る。

墓石には間違いなく『ノエル・ウッドワース』と彫られていた。

絶望と悲しみが舞い降りる。

虚無がどこまでも私に付き纏う。

私の贖罪はこれから始まるはずだった。

神は咎人である私を許さない。

塗り重ねられた罪にさらなる罰を与えるというのか。

夜には月が必要だ。

月がいなくては夜は生きていけない。

墓石を強く抱きしめる。

叫びたくてたまらなかった。

だが、声が出ない。

涙も出ない。

ただただ、抱きしめるしかなかった。

冷たい墓石が心も冷やしていく。

甘美な誘いが私の中で起こる。

私は震えた手で、ホルスターから拳銃をとりだし銃口をこめかみに向けた。

ひんやりとした、銃口はこの絶望から私を救い出してくれる。

そんな気がした。

夜に乾いた狂喜が響き、本当の闇が訪れる。

私は死を受け入れた。

沈黙の闇の中、一筋の光が一直線に伸びる。

暖かい、何だろう。

まるで春の木漏れ日のようだ。

私ができるように感じていると、光はどんどん強くなり、私を覆い始める。

長いこと忘れていた母の温もりのような安心感。

心が安らぎ、今までの苦しみから解放されていく気がする。

これが、天国というやつなのだろうか。

私はその光に手を伸ばす。

すると私の頬に絹のような手がそっと触れた。懐かしい香りだ。

私は誘われるようにゆっくりと目蓋を開けた。

陽光は眩しく、木々はまるで生きているかのようにザワザワと動いている。

風により甘い香りが運ばれ、その匂いがひどく懐かしい。

それはまさしく、生の香りだった。

わたしはまだこの世界にいた。

私はまだ此処にいる。

その事実で私にはもう十分だった。

安直に死を選ぼうとした私自身が許せず、震えが止まらなかった。恐怖が急に襲いかかってくる。

「大丈夫ですか？」

震えた私の体にそっと手をかけてくる。

声の主は私の目の前にいた。

白い古ぼけた帽子を被った少女。

目を疑った。

その姿は正にノエルそのものだった。

やっと、会えた。その感情だけが心を支配する。

私は気がついたら、その少女を抱きしめていた。

強く、そして優しく。

「会えた。やっと……会えた！」

喜びの涙で視界が滲んだ。

少女は黙って、泣きじゃくる私を撫でてくれた。

陽だまりの中で、十字架は静かに私に微笑んでいた。

夜のシラベ（後書き）

これにて完結です。

まあ、私としてはこれが初めての完結長編でした。

やはり、短編のようには上手くいきませんね。

これで書ききれなかったお話をどこか別の長編で補完出来たら良い
なと思います。

その時はまたお付き合いくださいますようお願い申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879x/>

夜のシラベ

2011年12月11日02時47分発行